

国立大学法人お茶の水女子大学長の業績評価書の概要

国立大学法人お茶の水女子大学
学長選考・監察会議

国立大学法人お茶の水女子大学学長選考・監察会議では、国立大学法人お茶の水女子大学学長の間接評価及び業績評価実施要項に基づき、学長が就任した日以後2年を経過した日から6月以内に在任中の業務の執行状況についての中間評価を行い、3年を経過した日から4月以内に在任中の取組により達成された実績に基づき業績評価を行うこととしている。

令和6年4月1日において、佐々木泰子学長が就任から3年を経過したことに伴い、在任中の取組により達成された実績に基づく業績評価を以下のとおり実施した。

I. 業績評価の実施

(1) 経過

令和4年4月1日 国立大学法人お茶の水女子大学学長の間接評価及び業績評価実施要項の改正

令和5年9月5日 中間評価の実施

令和6年6月25日 業績評価の実施

(2) 学長の面接

学長選考・監察会議は、佐々木学長が自ら作成した自己評価資料に基づくプレゼンテーションを受け、その後、学長との業務執行に関する質疑応答を行った。

(3) 監事の意見

中野監事及び宮井監事に学長選考・監察会議にご出席いただき、佐々木学長が自ら作成した資料に基づくプレゼンテーション及び、学長選考・監察会議委員と学長との質疑応答をうけ、両監事よりそれぞれ意見をいただいた。

(4) 確認資料

- ・第3期中期目標期間に係る業務の実績に関する報告書
- ・令和4事業年度に係る業務の実績に関する報告書
- ・令和5事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）
- ・学長選考時及び学長就任後の所信表明
- ・国立大学法人お茶の水女子大学長の業務執行の状況についての中間評価書

Ⅱ. 総合的な評価

佐々木 泰子学長の業績評価に係わる総合評価は、『期待を上回る業績である』と判定する。

Ⅲ. 特記事項（全体的なコメント）

・ここまでの業績については、前執行部が作ってきた計画案をつつがなく実行しているという感じを受ける。是非学長の独自の考えをもう少し前面に出して、運営を行なっていただきたい。場合によっては、これまでの執行部が立ててきた計画を変更してでも、こちらの方がよいという点などがあれば、広く教員の意見もとりたい改革をお願いしたい。

・国立大学法人が様々な構造的問題を抱えている中で、誠実で謙虚な人柄と、計画を着実かつ迅速に実行するリーダーシップで期待を上回る業績をあげている。お茶の水女子大学の崇高なミッションを実現するためには、お茶の水女子大学の役割や特徴、もっている機能を外に向けて強くアピールし、お茶の水女子大学を中心とした外部連携を構築すべきと考える。学長の誠実な人柄と熱意で学内と学外をまとめ、主導して欲しい。その際は、数多くある取組みの優先順位を付け、場合によったら中止すべき取組みも検討すべきである。

・刻々と変化する世界情勢と日本社会の中で、国立女子大学としてのお茶の水女子大学の立ち位置を認識しつつ、山積する課題に果敢に取り組んできた。新組織設置や事業拡充の業績に対しては謙虚に、また、他者に対して丁寧な説明や意思疎通に当たろうとする誠実な態度は、内外から信望を得ている。

・運営費交付金が削減された中で色々なことに取り組まなければならない状況下、教員の側からの負担軽減の声が多い中、誠実に丁寧な対応を心がけていると感じられる。コロナ禍にあっても国際的な認知の向上に努めるなど相当努力したであろう。学長の自己採点は謙虚すぎる。

・学長の業績報告については執行部及び職員全員の仕事の結果であり、よく少ない人数でここまで実行できた、というのが率直な意見である。少ない人員でよくここまで実行できたという立場からみれば、学長の低い自己評価は控えめな人柄として片づけてしまうには抵抗がある。これらの業績達成に参加した執行部側の能力が学長の期待を満たさなかったためなのか、あるいは学長自身のリーダーシップの方に問題があったのか、あるいは別の要因があるのか、掘り下げるべき課題である。

・学長の謙虚な人柄が、様々な改革を進めるのに大きな礎となっており、この3年間に実現した諸施策の原動力になっている。これまでの所信表明で掲げてきた目標に向かい、着実な取り組みを進めてきた点、並びに教育、研究、社会貢献、大学行政のバランスをとりながらマネジメントにあたってきたことは、大変印象的。一方で、この間に一気に立ち上げられた多くの研究所やプロジェクトについては、それぞれが大変魅力的でありながらも、その運営には、新たな教職員の雇用が難しいことや、教員の兼職などで対応しているという現状もあり、持続可能な活動をどのように展開するかという点が今後の課題となる。また、それぞれの研究所の活動が学部や研究科との関連において、どのように「オールお茶の水体制」を築いていくのかという点も、今後の展開に期待される点である。

・国立大学法人が置かれている非常に厳しい状況や、社会的不安定要因（コ

コロナ禍や国際紛争など)を考慮すれば、これまでの学長の取り組みは高く評価する。

- ・国立大学の学長は私立大学とは異なり法令等の規制がある中、独自性を打ち出し、リーダーシップを発揮し、教職員をけん引する立場にある。そのような中で学長が力を入れていた一つに「国際化」があり、海外の学長を招き学生も交えたディスカッションを行ったことは、これからのお茶の水女子大学が進むべき「国際化」への試金石となる。

- ・大学全体の取り組みは、非常に意欲的かつ多角的に展開されていて、その実績は高く評価されるべきである。学長及び執行部の尽力には心から敬意を表したい。しかし、お茶の水女子大学のさまざまな取り組みが、本当にぎりぎりの、精一杯の踏ん張りでかろうじて支えられ、維持されていることがひしひしと実感される。